CHAPTER **48**

トラブルシューティング

この章では、スイッチが稼動する Cisco IOS ソフトウェアに関連する問題を特定し、解決する方法について説明します。問題の性質に応じて、Command-Line Interface（CLI; コマンドライン インターフェイス）、デバイス マネージャ、または Network Assistant を使用して、問題を特定し解決できます。

特に記述がない限り、*スイッチ*という用語はスタンドアロン スイッチとスイッチ スタックを意味しています。

LED の説明など、トラブルシューティングの詳細については、ハードウェア インストレーション ガイドを参照してください。

（注） この章で使用するコマンドの構文および使用方法の詳細については、このリリースに対応するコマンド リファレンスおよび『*Cisco IOS Command Summary, Release 12.2*』を参照してください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 「ソフトウェアで障害が発生した場合の回復」（P.48-2）
- 「パスワードを忘れた場合の回復」（P.48-4）
- 「スイッチ スタック問題の回避」（P.48-9）（Catalyst Switch Module 3110 のみ）

  （注） 回復手順を実行するには、スイッチを直接操作しなければなりません。

- 「自動ネゴシエーションの不一致の防止」（P.48-10）
- 「温度のモニタリング」（P.48-10）
- 「ping の使用」（P.48-10）
- 「レイヤ 2 traceroute の使用」（P.48-12）
- 「IP traceroute の使用」（P.48-13）
- 「TDR の使用」（P.48-15）
- 「debug コマンドの使用」（P.48-16）
- 「show platform forward コマンドの使用」（P.48-18）
- 「crashinfo ファイルの使用」（P.48-20）
- 「オンボード障害ロギングの使用」（P.48-21）（Catalyst Switch Module 3110 のみ）
- 「CPU 使用率に関するトラブルシューティング」（P.48-23）

ソフトウェアで障害が発生した場合の回復

スイッチ ソフトウェアが破損する状況としては、アップグレードを行った場合、スイッチに誤ったファイルをダウンロードした場合、イメージ ファイルを削除した場合などが考えられます。いずれの場合にも、スイッチは Power-On Self-Test（POST; 電源投入時自己診断テスト）に失敗し、接続できなくなります。

次の手順では、ブート ローダ コマンドおよび TFTP を使用して、破損したイメージ ファイルまたは誤ったイメージ ファイルを回復します。

また、端末または PC をスイッチに接続し、スイッチをイーサネット経由で Advanced Management Module（AMM）に接続することもできます。内部イーサネット管理ポートの詳細については、「内部イーサネット管理ポートの使用」（P.11-14）およびハードウェア インストール ガイドを参照してください。

ここで紹介する回復手順を実行するには、スイッチを直接操作しなければなりません。

ステップ 1　PC 上で、ibm.com または Cisco.com から tar 形式のソフトウェア イメージ ファイル（*image_filename.tar*）をダウンロードします。

Cisco IOS イメージは、tar ファイルのディレクトリ内に bin ファイルとして格納されます。ibm.com または Cisco.com 上のソフトウェア イメージ ファイルの検索方法については、リリース ノートを参照してください。

ステップ 2　tar ファイルから bin ファイルを抽出します。

- Windows を使用している場合は、tar ファイルの読み取りが可能な zip プログラムを使用します。zip プログラムを使用して bin ファイルを特定し、抽出します。
- UNIX を使用している場合は、次の手順に従ってください。

1. **tar -tvf** <*image_filename.tar*> UNIX コマンドを使用して、tar ファイルの内容を表示します。

```
switch% tar -tvf image_filename.tar
```

2. **tar -xvf** <*image_filename.tar*> <*image_filename.bin*>UNIX コマンドを使用して、出力内の bin ファイル名を特定し、抽出します。

```
switch% tar -xvf image_filename.tar image_filename.bin
x cbs31x0-universal-mz.122-40.EX2/cbs31x0-universal-mz.122-40.EX2.bin, 3970586
bytes, 7756 tape blocks
```

3. **ls -l** *image_filename.bin* UNIX コマンドを使用して、bin ファイルが抽出されたことを確認します。

```
switch% ls -l image_filename.bin
-rw-r--r--   1 boba      3970586 Apr 21 12:00
cbs31x0-universal-mz.122-40.EX2/cbs31x0-universal-mz.122-40.EX2.bin
```

ステップ 3　PC をスイッチのイーサネット管理ポートに接続します。

ステップ 4　スイッチの電源コードを取り外します。

ステップ 5　スタッキング対応スイッチでは、次のいずれかの方法でスイッチの電源を切ります。

- スタンドアロンのスイッチの電源を切るか、AMM GUI を使用してスイッチ スタック全体の電源を切ります。
- スイッチまたはスタック メンバーをエンクロージャから取り外します。

スタッキング非対応スイッチの場合は、AMM GUI を使用してスイッチの電源を切るか、エンクロージャからスイッチを取り外します。

ステップ 6　Mode ボタンを押しながら、次のいずれかの方法でスイッチの電源を入れます。

- スイッチの電源を AMM GUI を使用して切断した場合は、GUI を使用してスイッチまたはスタックの電源を入れます。
- エンクロージャから取り外す方法でスイッチの電源を切った場合は、スタンドアロン スイッチまたはスタック メンバーをエンクロージャに再度挿入します。

点滅していたシステムの LED がグリーンの点灯になったら、Mode ボタンを放します。ソフトウェアに関する数行分の情報と指示が表示されます。

```
The system has been interrupted prior to initializing the flash file system. The following
commands will initialize the flash file system, and finish loading the operating system
software#
flash_init
boot
```

ステップ 7　フラッシュ ファイル システムを初期化します。

```
switch: flash_init
```

ステップ 8　イーサネット管理ポートを通じてスイッチを TFTP サーバに接続します。

ステップ 9　TFTP を使用してファイル転送を開始します。

a.　TFTP サーバの IP アドレスを指定します。

```
switch: set ip_addr ip_address/mask
```

b.　デフォルトのルータを指定します。

```
switch: set default_router ip_address
```

ステップ 10　TFTP サーバからスイッチにソフトウェア イメージを次のようにコピーします。

```
switch: copy tftp://ip_address/filesystem:/source-file-url flash:image_filename.bin
```

ステップ 11　新規にダウンロードされた Cisco IOS イメージを起動します。

```
switch: boot flash:image_filename.bin
```

ステップ 12　**archive download-sw** 特権 EXEC コマンドを使用して、スイッチまたはスイッチ スタックにソフトウェア イメージをダウンロードします。

ステップ 13　**reload** 特権 EXEC コマンドを使用してスイッチを再起動し、新しいソフトウェア イメージが適切に動作していることを確認します。

ステップ 14　スイッチから、flash:*image_filename.bin* ファイルを削除します。

パスワードを忘れた場合の回復

スイッチのデフォルト設定では、スイッチを直接操作するエンド ユーザが、スイッチの電源投入時に起動プロセスを中断して新しいパスワードを入力することにより、パスワードを紛失した状態から回復できます。ここで紹介する回復手順を実行するには、スイッチを直接操作してください。

（注）　これらのスイッチでは、システム管理者はデフォルト設定に戻す場合に限りエンド ユーザによるパスワードのリセットを許可することによって、この機能の一部をディセーブルにできます。パスワード回復がディセーブルになっている場合に、エンド ユーザがパスワードをリセットしようとすると、回復プロセスの間、ステータス メッセージにその旨が表示されます。

ここでは、スイッチのパスワードを忘れた場合の回復手順について説明します。

- 「パスワード回復がイネーブルになっている場合の手順」（P.48-5）
- 「パスワード回復がディセーブルになっている場合の手順」（P.48-7）

パスワードの回復をイネーブルまたはディセーブルにするには、**service password-recovery** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。**service password-recovery** または **no service password-recovery** コマンドをスタック マスターに入力すると、スタック全体にコマンドが伝播され、スタック内のすべてのスイッチに適用されます。

スイッチのパスワードを忘れた場合には、次の手順に従ってください。

ステップ 1　端末エミュレーション ソフトウェアが稼動している端末または PC をスイッチのコンソール ポートに接続します。スイッチ スタックのパスワードを回復する場合は、スタック マスターのコンソール ポートに接続します。

ステップ 2　エミュレーション ソフトウェアの回線速度を 9600 ボーに設定します。

ステップ 3　スタッキング対応スイッチでは、次のいずれかの方法でスイッチの電源を切ります。

- スタンドアロンのスイッチの電源を切るか、AMM GUI を使用してスイッチ スタック全体の電源を切ります。
- スイッチまたはスタック メンバーをエンクロージャから取り外します。

スタッキング非対応スイッチの場合は、AMM GUI を使用してスイッチの電源を切るか、エンクロージャからスイッチを取り外します。

ステップ 4　次のいずれかの方法でスイッチの電源を入れます。

- スイッチまたはスイッチ スタックの電源を切った場合は、自動的に電源が入るはずです。自動的に電源が入らない場合は、AMM GUI を使用してスイッチまたはスイッチ スタックの電源を入れます。
- スイッチの電源を AMM GUI を使用して切断した場合は、GUI を使用してスイッチまたはスタックの電源を入れます。
- エンクロージャから取り外す方法でスイッチの電源を切った場合は、スタンドアロン スイッチまたはスタック メンバーをエンクロージャに再度挿入します。

15 秒以内に、Mode ボタンを押します。このときシステム LED はグリーンに点滅しています。システム LED が一時的にオレンジになってからグリーンに点灯するまで Mode ボタンを押したままにしてください。グリーンになったら Mode ボタンを離します。

ソフトウェアについての情報および指示が数行表示され、パスワード回復手順がディセーブルであるかどうかが示されます。

- 次の内容で始まるメッセージが表示された場合

  ```
  The system has been interrupted prior to initializing the flash file system.The
  following commands will initialize the flash file system
  ```

  「パスワード回復がイネーブルになっている場合の手順」（P.48-5）に進んで、その手順に従います。

- 次の内容で始まるメッセージが表示された場合

  ```
  The password-recovery mechanism has been triggered, but is currently disabled.
  ```

  「パスワード回復がディセーブルになっている場合の手順」（P.48-7）に進んで、その手順に従います。

ステップ 5　パスワードが回復したら、スタッキング非対応スイッチ、スタンドアロン スイッチ、またはスタック マスターをリロードします。

スタッキング非対応スイッチの場合

```
Switch> reload
Proceed with reload?[confirm] y
```

スタッキング対応スイッチの場合

```
Switch> reload
 slot <stack-master-member-number>
Proceed with reload?[confirm] y
```

ステップ 6　スタッキング対応スイッチの場合は、スイッチ スタックの残りのメンバーの電源を入れます。

パスワード回復がイネーブルになっている場合の手順

パスワード回復メカニズムがイネーブルになっている場合は、次のメッセージが表示されます。

```
The system has been interrupted prior to initializing the flash file system. The following
commands will initialize the flash file system, and finish loading the operating system
software:

flash_init
load_helper
boot
```

ステップ 1　フラッシュ ファイル システムを初期化します。

```
switch: flash_init
```

ステップ 2　コンソール ポートの速度を 9600 以外に設定していた場合、9600 にリセットされます。エミュレーション ソフトウェアの回線速度をスイッチのコンソール ポートに合わせて変更します。

ステップ 3　ヘルパー ファイルがある場合にはロードします。

```
switch: load_helper
```

ステップ 4　フラッシュ メモリの内容を表示します。

```
switch: dir flash:
```

スイッチ ファイル システムが表示されます。

```
Directory of flash:
    2  -rwx        5752   Mar 1 1993 00:06:02 +00:00  config.text
    3  -rwx          24   Mar 1 1993 00:06:02 +00:00  private-config.text
    4  -rwx     9995193   Mar 1 1993 00:04:31 +00:00  cbs31x0-universal-mz.122-40.EX2
    6  -rwx        1147   Mar 1 1993 00:40:29 +00:00  FHH105002F6_IPBase.lic
    9  -rwx        1155   Mar 1 1993 23:55:57 +00:00  FHH105002F6_IPServ.lic
   10  -rwx        1161   Mar 1 1993 23:56:21 +00:00  FHH105002F6_AdvIPServ.lic
    8  -rwx        8016   Mar 1 1993 00:00:51 +00:00  vlan.dat

16128000 bytes total (10003456 bytes free)
```

ステップ 5　コンフィギュレーション ファイルの名前を config.text.old に変更します。

このファイルには、パスワード定義が収められています。

```
switch: rename flash:config.text flash:config.text.old
```

ステップ 6　システムを起動します。

```
switch: boot
```

ステップ 7　スイッチ プロンプトで、特権 EXEC モードを開始します。

```
Switch> enable
```

ステップ 8　コンフィギュレーション ファイルを元の名前に戻します。

```
Switch# rename flash:config.text.old flash:config.text
```

（注）　接続されたスタック メンバーの電源を入れ、完全に初期化されるまで待機してから、ステップ 9 に進んでください。このステップに従わないと、スイッチの設定によっては設定を失う可能性があります。

ステップ 9　コンフィギュレーション ファイルをメモリにコピーします。

```
Switch# copy flash:config.text system:running-config
Source filename [config.text]?
Destination filename [running-config]?
```

確認を求めるプロンプトに、**Return** キーを押して応答します。

これで、コンフィギュレーション ファイルがリロードされ、パスワードを変更できます。

ステップ 10　グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

```
Switch# configure terminal
```

ステップ 11　パスワードを変更します。

```
Switch (config)# enable secret password
```

シークレット パスワードは 1 ～ 25 文字の英数字です。数字で始めることができます。大文字と小文字が区別され、スペースを使用できますが、先行スペースは無視されます。

ステップ 12　特権 EXEC モードに戻ります。

```
Switch (config)# exit
Switch#
```

ステップ 13　実行コンフィギュレーションをスタートアップ コンフィギュレーション ファイルに書き込みます。

```
Switch# copy running-config startup-config
```

新しいパスワードがスタートアップ コンフィギュレーションに組み込まれました。

（注）　上記の手順を実行すると、スイッチの仮想インターフェイスがシャットダウン ステートになることがあります。このステートになっているインターフェイスを調べるには、**show running-config** 特権 EXEC コマンドを入力します。インターフェイスを再びイネーブルにするには、**interface vlan** *vlan-id* グローバル コンフィギュレーション コマンドを入力して、シャットダウン インターフェイスの VLAN ID を指定します。スイッチがインターフェイス コンフィギュレーション モードの状態で、**no shutdown** コマンドを入力します。

ステップ 14　スイッチまたはスイッチ スタックをリロードします。

```
Switch# reload
```

パスワード回復がディセーブルになっている場合の手順

パスワード回復メカニズムがディセーブルの場合、次のメッセージが表示されます。

```
The password-recovery mechanism has been triggered, but
is currently disabled.  Access to the boot loader prompt
through the password-recovery mechanism is disallowed at
this point.  However, if you agree to let the system be
reset back to the default system configuration, access
to the boot loader prompt can still be allowed.

Would you like to reset the system back to the default configuration (y/n)?
```

注意　スイッチをデフォルト設定に戻すと、既存の設定がすべて失われます。システム管理者に問い合わせて、バックアップ スイッチと VLAN（仮想 LAN）コンフィギュレーション ファイルがあるかどうかを確認してください。

- **n**（no）を入力すると、Mode ボタンを押さなかった場合と同様に、通常のブート プロセスが継続されます。ブート ローダ プロンプトにはアクセスできません。したがって、新しいパスワードを入力できません。次のメッセージが表示されます。

  ```
  Press Enter to continue........
  ```

- **y**（yes）を入力すると、フラッシュ メモリ内のコンフィギュレーション ファイルおよび VLAN データベース ファイルが削除されます。デフォルト設定がロードされるときに、パスワードをリセットできます。

ステップ 1　パスワード回復手順の継続を選択すると、既存の設定が失われます。

```
Would you like to reset the system back to the default configuration (y/n)? Y
```

ステップ 2　ヘルパー ファイルがある場合にはロードします。

```
Switch: load_helper
```

ステップ 3　フラッシュ メモリの内容を表示します。

```
switch: dir flash:
```

スイッチ ファイル システムが表示されます。

```
Directory of flash:
4  -rwx     9995193   Mar 1 1993 00:04:31 +00:00  cbs31x0-universal-mz.122-40.EX2
57931776 bytes total (35725824 bytes free)
```

ステップ 4　システムを起動します。

```
Switch: boot
```

セットアップ プログラムを起動するように求められます。パスワード回復手順を継続するには、プロンプトに **N** を入力します。

```
Continue with the configuration dialog? [yes/no]: N
```

ステップ 5　スイッチ プロンプトで、特権 EXEC モードを開始します。

```
Switch> enable
```

ステップ 6　グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

```
Switch# configure terminal
```

ステップ 7　パスワードを変更します。

```
Switch (config)# enable secret password
```

シークレット パスワードは 1 ～ 25 文字の英数字です。数字で始めることができます。大文字と小文字が区別され、スペースを使用できますが、先行スペースは無視されます。

ステップ 8　特権 EXEC モードに戻ります。

```
Switch (config)# exit
Switch#
```

（注）　接続されたスタック メンバーの電源を入れ、完全に初期化されるまで待機してから、ステップ 9 に進んでください。

ステップ 9　実行コンフィギュレーションをスタートアップ コンフィギュレーション ファイルに書き込みます。

```
Switch# copy running-config startup-config
```

新しいパスワードがスタートアップ コンフィギュレーションに組み込まれました。

（注）　上記の手順を実行すると、スイッチの仮想インターフェイスがシャットダウン ステートになることがあります。このステートになっているインターフェイスを調べるには、**show running-config** 特権 EXEC コマンドを入力します。インターフェイスを再びイネーブルにするには、**interface vlan** *vlan-id* グローバル コンフィギュレーション コマンドを入力して、シャットダウン インターフェイスの VLAN ID を指定します。スイッチがインターフェイス コンフィギュレーション モードの状態で、**no shutdown** コマンドを入力します。

ステップ 10　ここでスイッチを再設定する必要があります。システム管理者によって、バックアップ スイッチと VLAN コンフィギュレーション ファイルが使用可能に設定されている場合は、これらを使用します。

ステップ 11　スイッチをリロードします。

```
Switch# reload
```

スイッチ スタック問題の回避

（注）

- スイッチ スタックに追加またはスイッチ スタックから削除するスイッチの電源が切断されていることを確認します。スイッチ スタックの電源に関するすべての考慮事項については、ハードウェア インストレーション ガイドの「Switch Installation」の章を参照してください。
- スタック メンバーを追加または削除した後で、スタックがすべての帯域幅（32 Gbs）で動作していることを確認します。MBR LED が点灯するまで、スタック メンバーの Mode ボタンを押します。スイッチ上の最後の 2 つのポートの LED はグリーンに点灯します。スイッチ モデルに応じて、最後の 2 つのポートは 10/100/1000 ポートまたは 10 ギガビット イーサネット ポートのいずれかです。スタックは帯域幅をフルに使用しては稼動していません。
  - Catalyst Switch Module 3110X では、10 ギガビット イーサネット ポートの 2 つの LED の一方または両方がグリーンに点灯しません。スタック モード LED は、10 ギガビット イーサネット ポート LED です。
  - Catalyst Switch Module 3110G では、ポート 17 および 18 の LED がグリーンに点灯しません。
- スイッチ スタックを管理する場合は、CLI セッションを 1 つだけ使用することを推奨します。複数の CLI セッションをスタック マスターに使用する場合は注意が必要です。特定のセッションで入力したコマンドは、他のセッションに表示されません。したがって、コマンドを入力したセッションを識別できなくなることがあります。
- スタック内のスイッチの位置に従ってスタック メンバー番号を手動で割り当てると、離れた位置からのスイッチ スタックのトラブルシューティングが容易にできるようになります。ただし、後にスイッチを追加、削除、再編成する場合は、手動で割り当てられた番号を思い出す必要があります。スタック メンバー番号を手動で割り当てるには、**switch** *current-stack-member-number* **renumber** *new-stack-member-number* グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。スタック メンバー番号の詳細については、「スタック メンバー番号」（P.7-8）を参照してください。

スタック メンバーを同一モデルと交換した場合、新しいスイッチは交換前のスイッチとまったく同じ設定で動作します。また、新しいスイッチでは、交換前のスイッチと同じメンバー番号が使用されることが想定されます。

電源がオンの状態のスタック メンバーを取り外すと、スイッチ スタックがそれぞれ同じ設定を持つ複数のスイッチ スタックに分割（パーティション化）されます。スイッチ スタックを分割状態のまま使用する場合は、新規に作成されたスイッチ スタックの IP アドレスを変更します。パーティション化されたスイッチ スタックを元に戻すには、次の手順を実行します。

1. 新規に作成されたスイッチ スタックの電源を切断します。
2. 新しいスイッチ スタックを、StackWise Plus ポートを介して元のスイッチ スタックに再度接続します。
3. スイッチの電源をオンにします。

スイッチ スタックおよびスイッチ メンバーのモニタリングに使用できるコマンドについては、「スイッチ スタック情報の表示」（P.7-27）を参照してください。

自動ネゴシエーションの不一致の防止

IEEE 802.3ab 自動ネゴシエーション プロトコルは、スイッチの速度（10 Mbs、100 Mbs、および 1000 Mbs）およびデュプレックス（半二重または全二重）に関する設定を管理します。このプロトコルは設定を適切に調整しないことがあり、その場合はパフォーマンスが低下します。不一致は次の条件で発生します。

- 手動で設定した速度またはデュプレックスのパラメータが、接続ポート上で手動設定された速度またはデュプレックスの設定と異なっている場合。
- ポートが自動ネゴシエーション モードに設定されており、接続ポートが自動ネゴシエーションを指定せずに全二重に設定されている場合。

スイッチのパフォーマンスを最大限に引き出してリンクを確保するには、次のいずれかの注意事項に従って、デュプレックスおよび速度の設定を変更してください。

- 速度とデュプレックスの両方について、両方のポートで自動ネゴシエーションを実行させます。
- 接続の両側でポートの速度とデュプレックスのパラメータを手動で設定します。

（注）　接続先装置が自動ネゴシエーションを実行しない場合は、2 つのポートのデュプレックス設定を一致させます。速度パラメータは、接続先のポートが自動ネゴシエーションを実行しない場合でも自動調整が可能です。

温度のモニタリング

スイッチは、温度条件をモニタリングし、温度情報を使用してファンを制御します。

温度の値、状態、およびしきい値を表示するには、**show env temperature** status 特権 EXEC コマンドを使用します。温度の値は、スイッチ内の温度であり、外部の温度ではありません。**system env temperature threshold yellow** *value* グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用してイエローのしきい値レベル（摂氏）だけを設定し、イエローのしきい値およびレッドのしきい値の差を設定できます。グリーンまたはレッドのしきい値を設定することはできません。詳細については、このリリースのコマンド リファレンスを参照してください。

ping の使用

ここでは、次の情報について説明します。

- 「ping の概要」（P.48-10）
- 「ping の実行」（P.48-11）

ping の概要

スイッチは IP の ping をサポートしており、これを使ってリモート ホストへの接続をテストできます。ping はアドレスにエコー要求パケットを送信し、応答を待ちます。ping は次のいずれかの応答を返します。

- 正常な応答：正常な応答（*hostname* が存在する）は、ネットワーク トラフィックにもよりますが、1 ～ 10 秒以内で発生します。

- 宛先の応答なし：ホストが応答しない場合、*no-answer* メッセージが返ってきます。
- ホスト不明：ホストが存在しない場合、*unknown host* メッセージが返ってきます。
- 宛先に到達不能：デフォルト ゲートウェイが指定されたネットワークに到達できない場合、*destination-unreachable* メッセージが返ってきます。
- ネットワークまたはホストに到達不能：ルート テーブルにホストまたはネットワークに関するエントリがない場合、*network or host unreachable* メッセージが返ってきます。

ping の実行

別の IP サブネットワーク内のホストに ping を実行する場合は、ネットワークへのスタティック ルートを定義するか、またはこれらのサブネット間でルーティングされるように IP ルーティングを設定する必要があります。詳細については、第 39 章「IP ユニキャスト ルーティングの設定」を参照してください。

IP ルーティングは、デフォルトではすべてのスイッチでディセーブルになります。IP ルーティングをイネーブルにする場合、または設定する必要がある場合は、第 39 章「IP ユニキャスト ルーティングの設定」を参照してください。

ネットワーク上の別のデバイスに対してスイッチから ping を実行するには、特権 EXEC モードで次の手順を実行します。

コマンド	目的
ping ip *host* | *address*	IP またはホスト名やネットワーク アドレスを指定してリモート ホストへ ping を実行します。

（注） **ping** コマンドでは、他のプロトコル キーワードも使用可能ですが、このリリースではサポートされていません。

次に、IP ホストに ping を実行する例を示します。

```
Switch# ping 172.20.52.3

Type escape sequence to abort.
Sending 5, 100-byte ICMP Echoes to 172.20.52.3, timeout is 2 seconds:
!!!!!
Success rate is 100 percent (5/5), round-trip min/avg/max = 1/2/4 ms
Switch#
```

表 48-1 で、ping の文字出力について説明します。

表 48-1　ping の出力表示文字

文字	説明
!	感嘆符 1 つにつき 1 回の応答を受信したことを示します。
.	ピリオド 1 つにつき応答待ちの間にネットワーク サーバのタイムアウトが 1 回発生したことを示します。
U	宛先到達不能エラー PDU を受信したことを示します。
C	輻輳に遭遇したパケットを受信したことを示します。
I	ユーザによりテストが中断されたことを示します。

表 48-1　ping の出力表示文字 （続き）

文字	説明
?	パケット タイプが不明です。
&	パケットの存続時間を超過したことを示します。

ping セッションを終了するには、エスケープ シーケンス（デフォルトは **Ctrl+^ X**）を入力します。**Ctrl** キー、**Shift** キー、および **6** キーを同時に押してから放し、その後 **X** キーを押します。

レイヤ 2 traceroute の使用

ここでは、次の情報について説明します。

- 「レイヤ 2 traceroute の概要」（P.48-12）
- 「使用上のガイドライン」（P.48-12）
- 「物理パスの表示」（P.48-13）

レイヤ 2 traceroute の概要

レイヤ 2 traceroute 機能により、パケットが通過する、送信元デバイスから宛先デバイスへの物理パスを識別できます。レイヤ 2 traceroute はユニキャスト送信元および宛先 Media Access Control（MAC; メディア アクセス制御）アドレスだけをサポートします。パスにあるスイッチの MAC アドレス テーブルを使用してパスを検索します。スイッチがレイヤ 2 traceroute をサポートしないデバイスをパスで検出すると、スイッチはレイヤ 2 トレース キューを送信し続けてタイムアウトにしてしまいます。

スイッチは、送信元デバイスから宛先デバイスへのパスだけが識別できます。パケットが通過する、送信元ホストから送信元デバイスまで、または宛先デバイスから宛先ホストまでのパスは識別できません。

使用上のガイドライン

レイヤ 2 traceroute の使用上の注意事項を次に示します。

- Cisco Discovery Protocol（CDP; シスコ検出プロトコル）がネットワーク上のすべてのデバイスでイネーブルでなければなりません。レイヤ 2 traceroute が適切に動作するために、CDP をディセーブルにしないでください。

  レイヤ 2 traceroute をサポートするスイッチの一覧については、「使用上のガイドライン」（P.48-12）を参照してください。物理パス内のデバイスが CDP に対して透過的な場合、スイッチはこれらのデバイスを通過するパスを識別できません。CDP をイネーブルにする場合の詳細については第 27 章「CDP の設定」を参照してください。

- スイッチは、**ping** 特権 EXEC コマンドを使用して接続をテストする場合に他のスイッチから到達できます。物理パス内のすべてのスイッチは、他のスイッチから到達可能でなければなりません。
- パス内で識別できるホップ数は最大で 10 です。
- 送信元デバイスから宛先デバイスの物理パス内にないスイッチに、**traceroute mac** または **traceroute mac ip** 特権 EXEC コマンドを実行できます。パス内のすべてのスイッチは、このスイッチから到達可能でなければなりません。

- 指定した送信元および宛先 MAC アドレスが同一 VLAN に属する場合、**traceroute mac** コマンド出力はレイヤ 2 パスだけを表示します。異なる VLAN にある送信元および宛先 MAC アドレスを指定する場合、レイヤ 2 パスは識別されず、エラー メッセージが表示されます。
- マルチキャスト送信元または宛先 MAC アドレスを指定する場合、レイヤ 2 パスは識別されず、エラー メッセージが表示されます。
- 送信元または宛先 MAC アドレスが複数の VLAN に属している場合、送信元および宛先 MAC アドレスの両方が属する VLAN を指定しなければなりません。VLAN が指定されない場合、パスは識別されず、エラー メッセージが表示されます。
- 指定した送信元および宛先 IP アドレスが同一サブネットに属する場合、**traceroute mac ip** コマンド出力はレイヤ 2 パスを表示します。IP アドレスを指定する場合、スイッチは Address Resolution Protocol（ARP; アドレス解決プロトコル）を使用して、IP アドレスを対応する MAC アドレスおよび VLAN ID に関連付けます。
  - ARP エントリが指定した IP アドレスにある場合、スイッチは関連する MAC アドレスを使用して物理パスを識別します。
  - ARP のエントリが存在しない場合、スイッチは ARP クエリーを送信し、IP アドレスを解決しようと試みます。IP アドレスが解決されない場合、パスは識別されず、エラー メッセージが表示されます。
- 複数のデバイスがハブを介して 1 つのポートに接続されている場合（たとえば複数の CDP ネイバーがポートで検出された場合）、レイヤ 2 traceroute 機能はサポートされません。複数の CDP ネイバーが 1 つのポート上で検出されると、レイヤ 2 パスは識別されず、エラー メッセージが表示されます。
- この機能は、トークンリング VLAN ではサポートされません。

物理パスの表示

次のいずれかの特権 EXEC コマンドを使用して、パケットが通過する、送信元デバイスから宛先デバイスへの物理パスを表示できます。

- **tracetroute mac** [**interface** *interface-id*] {*source-mac-address*} [**interface** *interface-id*] {*destination-mac-address*} [**vlan** *vlan-id*] [**detail**]
- **tracetroute mac ip** {*source-ip-address* | *source-hostname*}{*destination-ip-address* | *destination-hostname*} [**detail**]

詳細については、このリリースのコマンド リファレンスを参照してください。

IP traceroute の使用

ここでは、次の情報について説明します。

- 「IP traceroute の概要」（P.48-14）
- 「IP traceroute の実行」（P.48-14）

IP traceroute の概要

IP traceroute を使用すると、ネットワーク上でパケットが通過するパスをホップバイホップで識別できます。このコマンドを実行すると、トラフィックが宛先に到達するまでに通過するルータなどのすべてのネットワーク レイヤ（レイヤ 3）デバイスが表示されます。

スイッチは、**traceroute** 特権 EXEC コマンドの送信元または宛先として指定できます。また、スイッチは **traceroute** コマンドの出力でホップとして表示される場合があります。スイッチを traceroute の宛先とすると、スイッチは、traceroute の出力で最終の宛先として表示されます。中間スイッチが同じ VLAN 内でポート間のパケットのブリッジングだけを行う場合、traceroute の出力に中間スイッチは表示されません。ただし、中間スイッチが、特定のパケットをルーティングするマルチレイヤ スイッチの場合、中間スイッチは traceroute の出力にホップとして表示されます。

traceroute 特権 EXEC コマンドは、IP ヘッダーの Time To Live（TTL; 存続可能時間）フィールドを使用して、ルータおよびサーバで特定のリターン メッセージが生成されるようにします。traceroute の実行は、User Datagram Protocol（UDP; ユーザ データグラム プロトコル）データグラムを、TTL フィールドが 1 に設定されている宛先ホストへ送信することから始まります。ルータが、TTL 値が 1 または 0 であることを検出すると、データグラムをドロップし、Internet Control Message Protocol（ICMP; インターネット制御メッセージ プロトコル）time-to-live-exceeded メッセージを送信元に送信します。traceroute は、ICMP time-to-live-exceeded メッセージの送信元アドレス フィールドを調べて、最初のホップのアドレスを検索します。

ネクスト ホップを識別するために、traceroute は TTL 値が 2 の UDP パケットを送信します。最初のルータは、TTL フィールドの値から 1 を差し引いて次のルータにデータグラムを送信します。2 番めのルータは、TTL 値が 1 であることを確認すると、このデータグラムを廃棄し、time-to-live-exceeded メッセージを送信元へ返します。このように、データグラムが宛先ホストに到達するまで（または TTL の最大値に達するまで）TTL の値は増分され、処理が続けられます。

データグラムが宛先に到達したことを学習するために、traceroute は、データグラムの UDP の宛先ポート番号を宛先ホストが使用しないような非常に大きい値に設定します。ホストが、ローカルで使用されない宛先ポート番号を持つ自分自身宛てのデータグラムを受信すると、送信元に *ICMP ポート到達不可能*エラーを送信します。ポート到達不可能エラー以外のすべてのエラーは、中間ホップから送信されるため、ポート到達不可能エラーを受信するということは、このメッセージが宛先ポートから送信されたことを意味します。

IP traceroute の実行

パケットがネットワークを通過するパスを追跡するには、特権 EXEC モードで次の手順を実行します。

コマンド	目的
traceroute ip *host*	ネットワーク上でパケットが通過するパスを追跡します。

（注）　**traceroute** 特権 EXEC コマンドでは、他のプロトコル キーワードも使用可能ですが、このリリースではサポートされていません。

次に、IP ホストに **traceroute** を実行する例を示します。

```
Switch# traceroute ip 171.9.15.10
Type escape sequence to abort.
Tracing the route to 171.69.115.10
1 172.2.52.1 0 msec 0 msec 4 msec
  2 172.2.1.203 12 msec 8 msec 0 msec
```

```
  3 171.9.16.6 4 msec 0 msec 0 msec
  4 171.9.4.5 0 msec 4 msec 0 msec
  5 171.9.121.34 0 msec 4 msec 4 msec
  6 171.9.15.9 120 msec 132 msec 128 msec
  7 171.9.15.10 132 msec 128 msec 128 msec
Switch#
```

この表示では、ホップ カウント、ルータの IP アドレス、および送信される 3 つのプローブぞれぞれのラウンドトリップ時間（ミリ秒）を示しています。

表 48-2　traceroute の出力表示文字

文字	説明
*	プローブがタイムアウトになりました。
?	パケット タイプが不明です。
A	管理上、到達不能です。通常、この出力は、アクセス リストがトラフィックをブロックしていることを表しています。
H	ホストが到達不能です。
N	ネットワークが到達不能です。
P	プロトコルが到達不能です。
Q	ソース クエンチ
U	ポートが到達不能です。

進行中の追跡を終了するには、エスケープ シーケンス（デフォルトは **Ctrl+^ X**）を入力します。**Ctrl** キー、**Shift** キー、および **6** キーを同時に押してから放し、その後 **X** キーを押します。

TDR の使用

ここでは、次の情報について説明します。

- 「TDR の概要」（P.48-15）
- 「TDR の実行および結果の表示」（P.48-16）

TDR の概要

Time Domain Reflector（TDR）機能を使用して、ケーブル配線の問題を診断し、解決することができます。TDR 稼動時、ローカル デバイスはケーブルを介して信号を受信し、最初に送信した信号と反射された信号を比較します。

TDR は、銅線のイーサネット 10/100/1000 ポートでサポートされます。10 ギガビット イーサネット ポートではサポートされません。

TDR は次のケーブル障害を検出できます。

- ツイストペア ケーブルの導線のオープン、損傷、切断：導線がリモート デバイスからの導線に接続されていない状態。
- ツイスト ペア ケーブルの導線のショート：導線が互いに接触している状態、またはリモート デバイスからの導線に接触している状態。たとえば、ツイスト ペア ケーブルの一方の導線がもう一方の導線にはんだ付けされていると、ツイスト ペア ケーブルのショートが発生します。

ツイストペアの導線の一方がオープンになっている場合、TDR はオープンになっている導線の長さを検出できます。

次の状況で TDR を使用して、ケーブル障害を診断および解決してください。

- スイッチの交換
- ワイヤリング クローゼットの設定
- リンクが確立できない、または適切に動作していない場合における、2 つのデバイス間の接続のトラブルシューティング

TDR の実行時、次の場合にスイッチは正確な情報をレポートします。

- ギガビット リンク用のケーブルが単線コア ケーブル
- オープンエンド ケーブルが未終端

TDR の実行時、次の場合にスイッチは正確な情報をレポートしません。

- ギガビットリンク用のケーブルがツイストペアケーブルまたは連続接続された単線コア ケーブル
- リンクが 10 Mb または 100 Mb
- より線ケーブル
- リンク パートナーが Cisco IP Phone
- リンク パートナーが IEEE 802.3 に準拠していない

TDR の実行および結果の表示

インターフェイス上で TDR を実行する場合は、スタック マスターまたはスタック メンバーで実行できます。

TDR を実行する場合、**test cable-diagnostics tdr interface** *interface-id* 特権 EXEC コマンドを実行します。

TDR の結果を表示するには、**show cable-diagnostics tdr interface** *interface-id* 特権 EXEC コマンドを実行します。表示される各フィールドの詳細については、このリリースに対応するコマンド リファレンスを参照してください。

debug コマンドの使用

ここでは、**debug** コマンドを使用して、インターネットワーキング問題を診断および解決する方法について説明します。

- 「特定機能に関するデバッグのイネーブル化」（P.48-17）
- 「システム全体診断のイネーブル化」（P.48-17）
- 「デバッグおよびエラー メッセージ出力のリダイレクト」（P.48-17）

注意　デバッグ出力には、CPU プロセスで高いプライオリティが割り当てられるので、システムが使用不能になる可能性があります。したがって、**debug** コマンドを使用するのは、特定の問題のトラブルシューティング時、またはシスコのテクニカル サポート担当者とともにトラブルシューティングを行う場合に限定してください。**debug** コマンドは、ネットワーク トラフィックが少なく、ユーザも少ないときに使用するのが最良です。このような時間帯を選んでデバッグを実行すると、**debug** コマンドの処理の負担によってシステム利用が影響を受ける可能性が少なくなります。

（注）　特定の **debug** コマンドの構文および使用方法の詳細については、このリリースのコマンド リファレンスを参照してください。

特定機能に関するデバッグのイネーブル化

スイッチ スタックでデバッグ機能をイネーブルにする場合、スタック マスター上でだけイネーブルになります。スタック メンバーでのデバックをイネーブルにするには、**session** *switch-number* 特権 EXEC コマンドを使用して、スタック メンバーからセッションを開始する必要があります。その後、スタック メンバーのコマンドライン プロンプトに **debug** コマンドを入力します。

debug コマンドはすべて特権 EXEC モードで実行します。ほとんどの **debug** コマンドは引数がありません。たとえば、Switched Port Analyzer（SPAN; スイッチド ポート アナライザ）に対するデバッグをイネーブルにするには、特権 EXEC モードで次のコマンドを入力します。

```
Switch# debug span-session
```

スイッチは **no** 形式のコマンドが入力されるまで、出力を生成し続けます。

debug コマンドをイネーブルにしても、出力が表示されない場合は、次の状況が考えられます。

- モニタするトラフィック タイプを生成するようにスイッチが正しく設定されていない可能性があります。**show running-config** コマンドを使用して、設定を確認してください。
- スイッチが正しく設定されていても、デバッグがイネーブルである間にモニタすべきタイプのトラフィックを生成しないことがあります。デバッグする機能によっては、TCP/IP の **ping** コマンドなどを使用すると、ネットワーク トラフィックを生成できます。

SPAN のデバッグをディセーブルにする場合は、特権 EXEC モードで次のコマンドを入力します。

```
Switch# no debug span-session
```

また、特権 EXEC モードで **undebug** 形式のコマンドを入力することもできます。

```
Switch# undebug span-session
```

各デバッグ オプションのステートを表示するには、特権 EXEC モードで次のコマンドを入力します。

```
Switch# show debugging
```

システム全体診断のイネーブル化

システム全体診断をイネーブルにするには、特権 EXEC モードで、次のコマンドを入力します。

```
Switch# debug all
```

注意　デバッグ出力は他のネットワーク トラフィックより優先され、**debug all** 特権 EXEC コマンドは他の **debug** コマンドより出力が大量になるため、スイッチのパフォーマンスが極度に低下したり、場合によっては使用不能になったりすることがあります。状況にかかわらず、特定性の高い **debug** コマンドを使用するのが原則です。

no debug all 特権 EXEC コマンドを使用すると、すべての診断出力がディセーブルになります。いずれかの **debug** コマンドが誤ってイネーブルのままにならないようにするには、**no debug all** コマンドを使用すると便利です。

デバッグおよびエラー メッセージ出力のリダイレクト

ネットワーク サーバはデフォルトで、**debug** コマンドおよびシステム エラー メッセージの出力をコンソールに送信します。このデフォルトの設定を使用する場合は、コンソール ポートまたはイーサネット管理ポートに接続する代わりに、仮想端末接続によってデバッグ出力をモニタできます。

出力先に指定できるのは、コンソール、仮想端末、内部バッファ、および Syslog サーバが稼動している UNIX ホストです。Syslog フォーマットは、4.3 Berkeley Standard Distribution（BSD）UNIX およびそのバリエーションと互換性があります。

（注）　デバッグの出力先がシステムのオーバーヘッドに影響を与えることがないように注意してください。コンソールでメッセージ ロギングを行うと、オーバーヘッドが非常に大きくなりますが、仮想端末でメッセージ ロギングを行うと、オーバーヘッドが小さくなります。Syslog サーバでメッセージ ロギングを行うと、オーバーヘッドはさらに小さくなり、内部バッファであれば最小限ですみます。

スタック メンバーによって生成されたシステム エラー メッセージは、スタック マスターによってすべてのスタック メンバーに表示されます。Syslog はスタック マスターに格納されています。

（注）　スタック マスターに障害が発生しても Syslog が失われないように、Syslog をフラッシュ メモリに保存してください。

システム メッセージ ロギングの詳細については、第 32 章「システム メッセージ ロギングの設定」を参照してください。

show platform forward コマンドの使用

show platform forward 特権 EXEC コマンドの出力からは、インターフェイスに入るパケットがシステムを介して送信された場合、転送結果に関して、有意義な情報がいくつか得られます。パケットに関して入力されたパラメータに応じて、参照テーブル結果、転送宛先の計算に使用されるポート マップ、ビットマップ、および出力側の情報が表示されます。

（注）　**show platform forward** コマンドの構文および使用方法の詳細については、このリリースに対応するスイッチ コマンド リファレンスを参照してください。

このコマンドで出力される情報のほとんどは、主に、スイッチの Application Specific Integrated Circuit（ASIC; 特定用途向け集積回路）に関する詳細情報を使用するテクニカル サポート担当者に役立つものです。ただし、パケット転送情報はトラブルシューティングにも役立ちます。

次に、VLAN 5 内のポート 1 に入るパケットが未知の MAC アドレスにアドレッシングされる場合の **show platform forward** コマンドの出力例を示します。パケットは VLAN 5 内のその他のすべてのポートに対してフラッディングされなければなりません。

```
Switch# show platform forward gigabitethernet1/0/1 vlan 5 1.1.1 2.2.2 ip 13.1.1.1 13.2.2.2
udp 10 20
Global Port Number:24, Asic Number:5
Src Real Vlan Id:5, Mapped Vlan Id:5

Ingress:
 Lookup                    Key-Used                    Index-Hit  A-Data
InptACL  40_0D020202_0D010101-00_40000014_000A0000     01FFA   03000000
L2Local  80_00050002_00020002-00_00000000_00000000     00C71   0000002B
Station Descriptor:02340000, DestIndex:0239, RewriteIndex:F005

=========================================
Egress:Asic 2, switch 1
Output Packets:

-----------------------------------------
```

```
Packet 1
 Lookup                    Key-Used                     Index-Hit  A-Data
OutptACL 50_0D020202_0D010101-00_40000014_000A0000     01FFE   03000000

Port       Vlan      SrcMac          DstMac    Cos  Dscpv
Gi1/0/1    0005 0001.0001.0001  0002.0002.0002

----------------------------------------
Packet 2
 Lookup                    Key-Used                     Index-Hit  A-Data
OutptACL 50_0D020202_0D010101-00_40000014_000A0000     01FFE   03000000

Port       Vlan      SrcMac          DstMac    Cos  Dscpv
Gi1/0/2    0005 0001.0001.0001  0002.0002.0002

----------------------------------------
<output truncated>
----------------------------------------
Packet 10
 Lookup                    Key-Used                     Index-Hit  A-Data
OutptACL 50_0D020202_0D010101-00_40000014_000A0000     01FFE   03000000
Packet dropped due to failed DEJA_VU Check on Gi1/0/2
```

次に、VLAN 5 のポート 1 に着信するパケットを、VLAN 上の別のポートで学習済みのアドレスに送信する場合の出力例を示します。パケットは、アドレスを学習したポートから転送する必要があります。

```
Switch# show platform forward gigabitethernet1/0/1 vlan 5 1.1.1 0009.43a8.0145 ip 13.1.1.1
13.2.2.2 udp 10 20
Global Port Number:24, Asic Number:5
Src Real Vlan Id:5, Mapped Vlan Id:5

Ingress:
 Lookup                    Key-Used                     Index-Hit  A-Data
InptACL  40_0D020202_0D010101-00_40000014_000A0000     01FFA   03000000
L2Local  80_00050009_43A80145-00_00000000_00000000     00086   02010197
Station Descriptor:F0050003, DestIndex:F005, RewriteIndex:0003

========================================
Egress:Asic 3, switch 1
Output Packets:

----------------------------------------
Packet 1
 Lookup                    Key-Used                     Index-Hit  A-Data
OutptACL 50_0D020202_0D010101-00_40000014_000A0000     01FFE   03000000

Port       Vlan      SrcMac          DstMac    Cos  Dscpv
Gi1/0/2    0005 0001.0001.0001  0009.43A8.0145
```

次に、VLAN 5 のポート 1 に着信するパケットの宛先 MAC アドレスが VLAN 5 のルータ MAC アドレスに設定されていて、宛先 IP アドレスが不明である場合の出力例を示します。デフォルト ルートが設定されていないため、パケットはドロップされます。

```
Switch# show platform forward gigabitethernet1/0/1 vlan 5 1.1.1 03.e319.ee44 ip 13.1.1.1
13.2.2.2 udp 10 20
Global Port Number:24, Asic Number:5
Src Real Vlan Id:5, Mapped Vlan Id:5

Ingress:
Lookup                     Key-Used                     Index-Hit  A-Data
InptACL  40_0D020202_0D010101-00_41000014_000A0000     01FFA   03000000
L3Local  00_00000000_00000000-90_00001400_0D020202     010F0   01880290
L3Scndr  12_0D020202_0D010101-00_40000014_000A0000     034E0   000C001D_00000000
Lookup Used:Secondary
```

```
Station Descriptor:02260000, DestIndex:0226, RewriteIndex:0000
```

次に、VLAN 5 のポート 1 に着信するパケットの宛先 MAC アドレスが VLAN 5 のルータ MAC アドレスに設定されていて、宛先 IP アドレスが IP ルーティング テーブル内の IP アドレスに設定されている場合の出力例を示します。パケットはルーティング テーブルの指定どおりに転送されます。

```
Switch# show platform forward gigabitethernet1/0/1 vlan 5 1.1.1 03.e319.ee44 ip 110.1.5.5
16.1.10.5
Global Port Number:24, Asic Number:5
Src Real Vlan Id:5, Mapped Vlan Id:5

Ingress:
Lookup                    Key-Used                      Index-Hit  A-Data
InptACL  40_10010A05_0A010505-00_41000014_000A0000     01FFA   03000000
L3Local  00_00000000_00000000-90_00001400_10010A05     010F0   01880290
L3Scndr  12_10010A05_0A010505-00_40000014_000A0000     01D28   30090001_00000000
Lookup Used:Secondary
Station Descriptor:F0070007, DestIndex:F007, RewriteIndex:0007

=========================================
Egress:Asic 3, switch 1
Output Packets:

-----------------------------------------
Packet 1
 Lookup                    Key-Used                      Index-Hit  A-Data
OutptACL 50_10010A05_0A010505-00_40000014_000A0000     01FFE   03000000

Port       Vlan      SrcMac          DstMac    Cos  Dscpv
Gi1/0/2    0007 XXXX.XXXX.0246  0009.43A8.0147
```

crashinfo ファイルの使用

crashinfo ファイルには、シスコのテクニカルサポート スタッフが Cisco IOS イメージの障害（クラッシュ）の原因となる問題をデバッグするときに役立つ情報が保存されています。スイッチは障害発生時にその情報をコンソールに書き込みます。スイッチは次の 2 種類の crashinfo ファイルを作成します。

- 基本 crashinfo ファイル：障害発生後に Cisco IOS イメージを起動すると、スイッチが自動的にこのファイルを作成します。
- 拡張 crashinfo ファイル：システム障害の発生時に、スイッチが自動的にこのファイルを作成します。

基本 crashinfo ファイル

基本ファイル内の情報には、障害が発生した Cisco IOS イメージの名前やバージョン、プロセッサ レジスタのリスト、およびスタック トレースが含まれます。**show tech-support** 特権 EXEC コマンドを使用することによって、この情報をシスコのテクニカル サポート担当者に提供できます。

基本 crashinfo ファイルは、フラッシュ ファイル システム内の次のディレクトリに保存されます。

flash:/crashinfo/

ファイル名は crashinfo_*n* になります。*n* にはシーケンス番号が入ります。

新たに作成される crashinfo ファイルごとに、既存のシーケンス番号よりも大きいシーケンス番号が使用されるため、シーケンス番号が最大であるファイルに最新の障害が記述されます。タイムスタンプではなく、バージョン番号を使用するのは、スイッチにリアルタイム クロックが組み込まれていないか

らです。ファイル作成時にシステムが使用するファイル名を変更することはできません。ただし、ファイルが作成されてから、**rename** 特権 EXEC コマンドを使用して名前を変更することもできますが、**show stacks** または **show tech-support** 特権 EXEC コマンドを実行しても、名前が変更されたファイルの内容は表示されません。**delete** 特権 EXEC コマンドを使用して crashinfo ファイルを削除できます。

最新の crashinfo ファイル（つまり、ファイル名の末尾のシーケンス番号が最大であるファイル）を表示する場合は、**show stacks** または **show tech-support** 特権 EXEC コマンドを使用します。**more** 特権 EXEC コマンド、**copy** 特権 EXEC コマンドなど、ファイルのコピーまたは表示が可能な任意のコマンドを使用して、ファイルにアクセスすることもできます。

拡張 crashinfo ファイル

スイッチは、システム障害の発生時に拡張 crashinfo ファイルを作成します。拡張 crashinfo ファイルには、スイッチの障害の原因を判別するのに役立つその他の追加情報が含まれます。このファイルに手動でアクセスし、**more** または **copy** 特権 EXEC コマンドを使用すると、シスコのテクニカル サポート担当者にこの情報を提供できます。

拡張 crashinfo ファイルは、フラッシュ ファイル システム内の次のディレクトリに保存されます。

flash:/crashinfo_ext/

ファイル名は crashinfo_ext_*n* になります。*n* にはシーケンス番号が入ります。

no exception crashinfo グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用すると、スイッチが拡張 creashinfo ファイルを作成しないように設定できます。

オンボード障害ロギングの使用

On-Board-Failure Logging（OBFL; オンボード障害ロギング）機能を使用して、スイッチに関する情報を収集できます。動作時間、温度、および電圧などの情報が含まれ、シスコのテクニカル サポート担当者がスイッチの問題をトラブルシューティングするのに役立ちます。OBFL はイネーブルにしておき、フラッシュ メモリに保存された情報は消去しないことを推奨します。

ここでは、次の情報について説明します。

- 「OBFL の概要」（P.48-21）
- 「OBFL の設定」（P.48-22）
- 「OBFL 情報の表示」（P.48-22）

OBFL の概要

デフォルトでは、OBFL はイネーブルに設定されています。スイッチに関する情報が収集されます。スイッチは、次の情報をフラッシュ メモリに保存します。

- CLI コマンド：スタンドアロン スイッチまたはスイッチ スタック メンバーに入力した OBFL CLI コマンドの記録
- 環境データ：スタンドアロン スイッチまたはスタック メンバー、および接続されているすべての FRU デバイスの Unique Device Identifier（UDI）情報。この情報には、Product Identification（PID; 製造識別）、Version Identification（VID）、およびシリアル番号が含まれます。
- メッセージ：スタンドアロン スイッチまたはスタック メンバーが生成するハードウェア関連のシステム メッセージの記録

- 温度：スタンドアロン スイッチまたはスタック メンバーの温度
- 動作時間データ：スタンドアロン スイッチまたはスタック メンバーの起動時刻、スイッチの再起動の理由、最後の再起動からの経過時間
- 電圧：スタンドアロン スイッチまたはスタック メンバーのシステム電圧

システム クロックを手動または Network Time Protocol（NTP; ネットワーク タイム プロトコル）を使用して設定してください。

OBFL データは、スイッチの稼動中に **show logging onboard** 特権 EXEC コマンドを使用して取得できます。スイッチの障害が発生したときは、シスコのテクニカル サポート担当者にデータの取得方法を問い合せてください。

OBFL 対応スイッチの再起動時は、新しいデータのロギングが開始されるまで 10 分間の遅延が発生します。

OBFL の設定

OBFL をイネーブルにするには、**hw-module module** [*switch-number*] **logging onboard** [**message level** *level*] グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。スタッキング対応スイッチの場合、*switch-number* に指定できる範囲は 1 ～ 9 です。スタッキング非対応スイッチの場合、スイッチ番号は常に 1 になります。スイッチが生成してフラッシュ メモリに保存するハードウェア関連メッセージの重要度を指定するには、**message level** *level* パラメータを使用します。

OBFL データをローカル ネットワークまたは特定のファイル システムにコピーするには、**copy logging onboard module** *stack-member destination* 特権 EXEC コマンドを使用します。

注意　OBFL をディセーブルにしないこと、およびフラッシュ メモリに保存されたデータを削除しないことを推奨します。

OBFL をディセーブルにするには、**no hw-module module** [*switch-number*] **logging onboard** [**message level**] グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

動作期間および CLI コマンド情報を除いたすべての OBFL データをフラッシュ メモリからクリアするには、**clear logging onboard** 特権 EXEC コマンドを使用します。

スイッチ スタックの場合、スタンドアロン スイッチまたはすべてのスタック メンバーの OBFL をイネーブルにするには、**hw-module module logging onboard** [**message level** *level*] グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

ここで説明したコマンドの詳細については、このリリースに対応するコマンド リファレンスを参照してください。

OBFL 情報の表示

OBFL 情報を表示するには、表 48-3 に示す特権 EXEC コマンドを 1 つ以上使用します。

表 48-3　OBFL 情報を表示するためのコマンド

コマンド	目的
show logging onboard [**module** [*switch-number*]] **clilog**	スタンドアロン スイッチまたは指定したスタック メンバーに入力された OBFL CLI コマンドを表示します。
show logging onboard [**module** [*switch-number*]] **environment**	スタンドアロン スイッチまたは指定したスタック メンバー、および接続されているすべての FRU デバイスの UDI 情報を表示します。この情報には PID、VID、およびシリアル番号が含まれます。

表 48-3　OBFL 情報を表示するためのコマンド（続き）

コマンド	目的
show logging onboard [**module** [*switch-number*]] **message**	スタンドアロン スイッチまたは指定したスタック メンバーが生成したハードウェア関連のメッセージを表示します。
show logging onboard [**module** [*switch-number*]] **poe**	スタンドアロン スイッチまたは指定したスタック メンバーの PoE ポートの電力消費量を表示します。
show logging onboard [**module** [*switch-number*]] **temperature**	スタンドアロン スイッチまたは指定したスタック メンバーの温度を表示します。
show logging onboard [**module** [*switch-number*]] **uptime**	スタンドアロン スイッチまたは指定したスタック メンバーの起動時間、スタンドアロン スイッチまたは指定したスタック メンバーの再起動の理由、およびスタンドアロン スイッチまたは指定したスタック メンバーの最後の再起動からの経過時間を表示します。
show logging onboard [**module** [*switch-number*]] **voltage**	スタンドアロン スイッチまたは指定したスタック メンバーのシステム電圧を表示します。

表 48-3 のコマンドの使用方法に関する詳細および OBFL データの例については、このリリースに対応するコマンド リファレンスを参照してください。

CPU 使用率に関するトラブルシューティング

ここでは、CPU が過度にビジーになったことが原因で起こり得る問題の症状を一覧し、CPU の使用率に関する問題の検証方法を示します。表 48-4 に、CPU 使用率に関して特定できる問題の主な種類を示します。考えられる原因と対処方法、および Cisco.com の『*Troubleshooting High CPU Utilization*』へのリンクが記載されています。

CPU 使用率が高い場合に考えられる症状

CPU 使用率が過度に高くなると次の症状が現れる場合がありますが、これらは他の原因によって引き起こされる可能性もあることに留意してください。

- スパニング ツリー トポロジの変更
- 接続が切断されたために EtherChannel リンクが停止する
- 管理要求への応答の失敗（ICMP ping や SNMP のタイムアウト、Telnet または SSH セッションの低速化）
- UDLD のフラッピング
- SLA 応答が許容可能なしきい値を超過したことが原因の IP SLA の障害
- スイッチが要求を転送しないか要求に応答しない場合に発生する、DHCP または IEEE 802.1x の障害

レイヤ 3 スイッチの場合

- パケットのドロップまたは、ソフトウェアのルーテッド パケットの遅延の増加
- BGP または OSPF ルーティング トポロジの変更
- HSRP のフラッピング

問題および原因の検証

高い CPU 使用率が問題になっているかを判別するには、**show processes cpu sorted** 特権 EXEC コマンドを入力します。出力例の 1 行目の下線部分の情報に注目してください。

```
Switch# show processes cpu sorted
CPU utilization for five seconds: 8%/0%; one minute: 7%; five minutes: 8%
PID Runtime(ms) Invoked uSecs 5Sec 1Min 5Min TTY Process
309 42289103 752750 56180 1.75% 1.20% 1.22% 0 RIP Timers
140 8820183 4942081 1784 0.63% 0.37% 0.30% 0 HRPC qos request
100 3427318 16150534 212 0.47% 0.14% 0.11% 0 HRPC pm-counters
192 3093252 14081112 219 0.31% 0.14% 0.11% 0 Spanning Tree
143 8 37 216 0.15% 0.01% 0.00% 0 Exec
...
<output truncated>
```

この例では、CPU の使用率は正常であると示しています。出力によると、最後の 5 秒間の使用率が *8%/0%* であると示していますが、これは次のことを意味します。

- CPU の合計の使用率は 8% で、これには、Cisco IOS プロセスの実行時間と割り込み処理の所要時間の両方の合計が含まれています。
- 割り込みの処理の所要時間はゼロ % です。

表 48-4　CPU 使用率に関する問題のトラブルシューティング

問題の種類	原因	対処方法
割り込みのパーセント値が CPU 使用率の合計値と同じ程度に高い。	CPU がネットワークから受信するパケット数が多すぎる。	ネットワーク パケットの送信元を判別する。フローを停止するかスイッチの設定を変更してください。「Analyzing Network Traffic」を参照してください。
割り込みにかかった時間が最小限の CPU の合計使用率が 50% を超えている。	1 つ以上の Cisco IOS プロセスが過大な CPU の時間を消費している。これは通常、プロセスをアクティブにするイベントによってトリガされます。	異常なイベントを識別し、根本の原因をトラブルシューティングする。「Debugging Active Processes」を参照してください。

CPU 使用率および使用率の問題のトラブルシューティング方法の詳細については、Cisco.com の『*Troubleshooting High CPU Utilization*』を参照してください。